

## 老人愚考

有田正史<sup>1)</sup>

私の趣味は碁石を並べることである。昼休みには毎日石を並べ、土日は自宅で一日中碁盤と向き合っている。こんなに努力しても棋力は少しも向上しない。碁は対局者の打った石との対話であると言われるが、私の置く石は自分勝手に碁盤の上での対話が成立していないために連戦連敗の山を築いている。それでも石を並べるのをやめないのは、黒と白の石が盤面に置かれるとそれぞれの役割を果たすという人生にも似た非常に高度化したゲームだからであろう。

石との対話と言う点では、地質学も類似している。我々は様々な地球科学の分野で石と対話し、遥か昔の世界に溶け込むことができる特殊な技能集団である。しかし一方では、理論と検証を重要視する他の研究分野からすれば我々是非論理なロマンチストの集団としか受け取られないようで、楽しく山を歩いて研究できるから良いねという評価が与えられる。我々が物言わぬ石から得た地球情報は我々の生活基盤を効率的に維持するために重要なものであると地質屋の一人としての私には思われる。しかしながら、現代社会にとって地質情報が必要不可欠かと質問されると必要性の理由は思いつくが、不可欠性については私自身も相手を説得する自信はない。よくよく考えて見れば地質情報の必要不可欠性は専門家集団の中だけで通用する特殊言語で、それが社会的に通用する言語であると錯覚していることに、地質学が社会から遊離して行った最大の原因があると思われる。碁で言えば対局者なしに自分勝手に思いつきで石をならべるのに似ている。これでは少しも状況は改善されないであろう。今、早急に必要なのは社会との対

話を取り戻すことである。対話といっても我々の特殊言語で講演を行っても社会は消化不良を起こすだけであろう。この対話を成功させるためには地質情報と社会を結び付ける辞書の役割をする活動が必要である。地質調査所では地質情報の有効性は地域的固有性を持つとの認識の上で地質学会開催地で十分とはいえないまでも地方地質情報展を開催してきた。このような活動が全国規模で展開され、地質情報がなくても道路、宅地開発などの土木工事は可能であるが、地質情報に基づいて開発計画をたてれば地質災害時の被害を最小限に留めることができることなどが広く理解されるようになれば、我々は社会と共通言語を持てるであろう。

いま一つ、社会との対話を推進するためには、元英国地質調査所長クック博士が指摘しているように、地球科学者は美しい山岳地帯から離れて、従来の研究手法を活用して都市およびその周辺の生活場の中に研究対象を移行させるべきである。これには我々自身の抜本的な意識改革が必要なのではなかろうか。国立研究所の独立法人化の足音が静かに近づいている。独立法人化後に地球科学者集団に対して社会がどのような評価を下すのかわからないけれども、高校教育から地学が消滅して行ったように、近視眼的な不要不急論で地球科学が空洞化させられるようなことは避けたいものである。将来は地質調査所で仕事をしたいと目を輝かせていたサイエンス・キャンプの子供達の顔を思い出しながら、彼等の夢をかなえさせる何か良い方法はないのかと定年間近の老人が愚考している。

1) 地質調査所 統括研究調査官